
あわわの辻

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あわわの辻

【Nコード】

N6011D

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

京都あわわの辻に不穏な話が出ていた。ことの解決を藤原道長に依頼された安倍清明は夜にそこに向かうと辻にいたのは。大鏡からヒントを得た作品です。京都にはこんな話が多いです。

第一章

あわわの辻

今は昔平安京での話である。

都において不穏な噂が流れることはしょっちゅうであったがこの時もそうであった。二条通りと大宮通りの交差するあわわの辻において怪しげな噂が流れていたのだ。

「あやかしの者達がですか」

「左様」

鋭利な顔をした切れ長の目を持つ男に対して彼とは正反対にふっくらとしてそれでいて傲岸不遜な印象を与える男が応えていた。一方は宮中に仕える陰陽師で安倍清明といい一方は時の帝の皇后陛下の父親であり権勢を欲しいままにしている藤原道長であった。その道長がわざわざ清明の家に来て話をしているのである。それだけで話はかなりのおのであることは容易に推察がいった。

「それがのう、一つや二つだけではないのじゃ」

「といたしますと」

「数えきれぬ程おもしろいのじゃ」

怪訝な顔で清明に対して語る。

「尋常ではなくな。それでじゃ」

「私に。ことの次第の究明と解決をですか」

「よいか？」

ここまで話したうえでじつと清明の顔を見て問う。細面の顔は女性的ですらあり黒髪が美しい。実際の歳はもっと上の筈なのに二十代の若さをまだ保っている顔であった。道長はその顔をまじまじと眺めながら清明に対して問うのであった。

「この度も」

「はい」

そして清明はその要請にむべもなく返答するのであった。

「私は陰陽師です」

まずはこう述べるのであった。

「それならば異形の者達に対するのも仕事のうえです。ですから」
「済まぬのう」

道長は清明の言葉を受けて礼を返した。

「そう言ってくれると有り難い。それではじゃ」

「はい、早速」

清明は応えた。ここまで話してはもう答えは決まっている。向かい合って座ったままであったがそれでも二人の間を緊張が走りだしていた。

「今夜取り掛かせて頂きます」

「頼むぞ。また礼を届けさせてもらうからな」

「それは無用のこと」

清明は道長からの恩賞は要らぬというのだった。

「これは当然のことですから」

「そなたにとつてはか」

「はい、都で異形の者が出たとあれば」

彼の顔が険しいものになる。そうして陰陽師として語るのであった。

「帝にも危害が及びかねません。それはあつてはなりません」

「帝もこのことに御気分を悪くなされておる」

道長にとつては娘婿である。権勢を欲しいままにする彼はその帝の位をも自由自在にしていたがそれでも心配なものには変わりがない。何といつても娘婿である。これも当然と言えば当然であった。権勢ばかりの男ではないということである。

「だからじゃ。これは言うつもりはなかったが」

清明の顔を見て言う。

「早いうちにな。頼むぞ」

「それでは」

こうして清明はその夜のうちに動くことになった。真夜中にその

あわわの辻まで牛車で着く。あまり派手とは言えない質素な牛車である。連れている従者も僅かである。だがその従者は清明の弟子達であり陰陽道に通じている者達であった。

「清明様」

その従者の一人が牛車の中にいる清明に声をかけてきた。

「着きましてでございます」

「わかった」

その言葉を聞いて清明が牛車から出て来た。そうしてすぐに道に降りた。まるで天から降りたかのようにふわりと降りるのであった。そうして漆黒の夜の闇の中で辻を見るのであった。

「それではな。まずは」

「どう為されるのですか？」

「これを貼るがいい」

そう言つて従者達に数枚の札を出してきた。

「それは」

「これを己の身体に貼れば姿が消える」

そう従者達に述べる。

「あやかしの者達にも見えはせぬ。だからだ」

「成程、用心の為ですね」

「そうだ」

こう彼等に答える。

「わかったならば。よいな」

「はい」

「それでは」

従者達もその言葉を受け清明に言われるまま自分の服に札を貼る。そうして姿を消し何者が出るかを見守るのであった。

札を貼ってからすぐにであった。清明は辻の向こうから唯ならぬものが迫って来るのを感じた。それを感じてその切れ長の目がさらに細まり鋭いものになった。

「これは」

「はい」

「まさしく」

従者達もそれを感じていた。これは唯ならぬ妖気であった。

第二章

しかも道長の話通り一つや二つではない。尚且つその一つ一つがあまりにも強い。清明でさえもそれを感じて身構えずにはいられない程であった。

だがそれでも。彼は冷静さを保っていた。そのうえで従者達に言うのであった。

「動くことのないように」

「動いてはですか」

「大きな声も出してはいけない。そうすれば気付かれる」

こう彼等に告げる。

「よいな。それは気をつけるように」

「わかりました」

以後彼等は口をつぐんだ。清明も。その間にも妖気は迫り最早それは冷や汗をかかずにはいられない程であった。幾多の異形の者達を相手にしてきた清明もそれは同じで固唾を飲んで彼等が来るのを見据えていた。そうして辻に現われたのは。

まずは異常なまでに大きな男であった。弥生の頃の礼服に身を包み鎌髭を持っている。赤く爛々とした目をしていて白い顔をしている。

「あれは」

「御存知なのですか？」

小声をあげた清明に対して従者の一人がこれまた小声で問う。

「蘇我入鹿だ」

「蘇我入鹿といますと」

「あの大化の改新で」

「そうだ、あの蘇我入鹿だ」

大化の改新の政変により殺された男だ。その首は飛び中臣鎌足を追ったと言われている。この時代においては逆臣の最たるものとし

て言われている。

その彼が出て来たのだ。しかもその両手にシヤクを恭しく掲げている。しかもそこには『怨藤原』と血で赤く書かれていた。

その次に来たのは太った恰幅のいい男であった。入鹿に比べて小柄だがその顔は似ている。清明は彼のことも知っていた。

「蘇我蝦夷だな」

「蘇我入鹿の父ですね」

「そうだ。他にもいるぞ」

見れば彼等の後ろにもまだ続いている。誰も彼もが清明の知る者達であった。そしてそれは。清明にとってではなく他の血筋の者にとって甚だ不吉な者達であった。

「蘇我石川麻呂だ」

「あの髭のない老人ですか」

「そうだ、彼がだ」

見れば蘇我蝦夷の後ろに髭のない黒い礼服の老人がいる。やはり顔は蒼白であり目は血の色をしている。そうして怨みに満ちた顔をしていた。

「他にいるのは」

「誰ですか？」

「山背大兄皇子だな」

若い口から血の糸を引いている男を見て言う。やはり動きはしない。

「他には大津皇子、山辺皇女。皆これは」

「怨みを飲んで死んだ者達ばかりですね」

「だがそれだけではない」

清明はこう従者達に述べるのだった。彼もまた険しい顔になっていた。

「これは。このままにしておく」

他にも多くの者がいた。列は延々と続き白い法衣を纏った不気味な僧侶もいれば裸形の群衆も飛び跳ねている。彼等はそのまま不気

味なまでに静かに道を進み辻に集まった。それから御所を見て一斉に叫び声をあげるのであった。

「怨!!」

一言であった。だがそれで十分な程怨みに満ちた地の底から響くような声であった。

それは清明も今まで聞いたことのないような叫び声であった。その声が御所に対して向けられている。清明はそれに対して危惧を感じずにはいられなかった。

「これは一体」

「何故御所を」

「彼等は怨みを飲んで死んでいる」

清明は今しがた従者の一人が言った言葉をその従者に返した。

「これまでの歴史では。皇室においても様々なことがあった」

「そうですね」

「それは」

これについては従者達も知っている。歴史にあるからだ。

「それで御所を怨んでいるのだ。だがそれは」

「それは？他にもあるのですか」

「ある。見よ」

怨霊達を見るように言う。見れば彼等は今度は道長の邸宅がある方を見ていた。そうしてそこに対しても怨みに満ちた声を放っているのだった。

「怨！」

またこう叫ぶ。その声もやはり恐れを抱かずにはいられないものであった。清明もその言葉には内心震えずにはいられなかった。それ程までのものであった。

しかし彼等を放っておくことはできない。彼はここで従者達に対して言うのだった。

「これより道を使う」

「陰陽道をですか」

「そうだ、放つてはおけぬ」

険しい顔になって怨霊達を見据えながら答えるのだった。

「このままでは帝にも道長殿にも災いが及ぶ。それだけはならん」

「確かに」

「それだけは」

「わかつたな。では」

懐から札を取り出した。言うまでもなく式神のそれである。それで怨霊達を退治するつもりであった。しかもその数はいつもより多い。

それを使おうとすると不意に怨霊達がこちらに顔を向けてきた。

気付かれたのだ。

「お師匠様」

「どうやら我々に気付いたようです」

「恐れることはない」

清明はその真つ赤に燃える無数の目を前にして従者達に言葉を返す。

「恐れるならば死ぬぞ」

「死ですか」

「そうだ。そなた達は動くな」

彼等に対しては迂闊な動きを止めた。

「彼等の相手は私しか出来ぬ。ならば」

怨霊達が動いてきた。ぞつとするような顔と咆哮をあげながら清明に迫る。清明はその彼等に向かって札を投げた。その札達がすぐに鬼となった。尋常でない数の鬼達が怨霊達に向かう。そうしてその手にある爪や牙で次々に襲い掛かるのであった。

第三章

怨霊達もその爪や牙で向かう。互いに噛み合い引き裂き合い殺し合う。血こそ流れはしないがそこにあるのは凄惨な殺し合いであった。鬼達も怨霊達も互いにその数を減らしていく。清明はそれを見てまた式神を放つ。それと共にその腰にある刀を抜くのだった。

「それはまさか」

「左様、破敵の剣だ」

そう従者達に述べる。

「あらゆる邪なものを断ち切るこの剣で。あの者達を切る」

「鬼達だけでは駄目なのですか」

「普通の者達ならばそれでいける」

清明はその破敵の剣を構えながら述べる。

「だがあの者達の怨みは深い。ならばこそ」

「その剣でなければですか」

「よいか」

そこまで話したうえでまた従者達に対して声をかける。

「そこから一步も出るな。何があるうとも」

「何があるうともですか」

「出れば死ぬ」

一言であった。

「忽ちのうちに怨霊達により八つ裂きにされてしまつぞ」

「忽ちのうちにですか」

「そうなりたくなければ動くな」

そこを念を押す。

「よいな」

「は、はい」

「それではお師匠様」

「全ては私に任せるのだ」

構えを引き絞る。その前にいるのは石川麻呂の霊だった。今まさに清明に向かわんとしていた。

「破っ」

剣を右から左に一閃させる。その両手の爪で上から引き裂こうとしていた石川麻呂の身体はそれで二つに分かれた。そうして苦悶の声と共に黒い霧となって掻き消えたのであった。

「そなた等の怨みはわかる」

清明は石川麻呂を斬った後でこう呟いた。

「だがそれは忘れよ。何時までも持つものではない」

それが彼等に告げる言葉だった。

「そして。迷いを断ち切って成仏するのだ。怨みを忘れられぬのなら私がそれを断ち切ってやろう」

そこまで呟いてまた剣を構える。今度は大津皇子に向かう。そうしてその剣と式神で怨霊達を次々と消し去っていく。最後に残ったのは蘇我入鹿であった。

「やはり残ったのはそなたか」

清明は自分の倍はあろうかという巨大な入鹿を見上げて言った。

「大化の改新、忘れてはおらぬか」

「忘れることがあるうか」

真つ赤な目で清明を見下ろしての言葉であった。やはりその声は地の底から響くようなものであり人の心を凍えさせるには十二分のものであった。

「わしはあの者達により滅ぼされた。この怨みは決して」

「忘れられぬか。当然であろう」

ここでは入鹿の為してきたことには触れはしなかった。それを言っても詮無いことだと清明もわかっていたからである。

「しかしだ。それを忘れよ」

「忘れろというのか」

「怨みは何も生み出しはしない」

それが清明に対する言葉であった。

「だからだ。いいな」

「忘れるなぞ。できようものなら」

その声にさらに怒りが満ちる。既に他の悪霊達も鬼達もいはい。残っているのは彼等だけである。二人で辻の中央に立っているのだ。

第四章

「とうの昔に忘れておるわ。中大兄への、中臣への怨み」

その怨みが今彼をここに存在させている。それが全てなのだ。

「何があるうとも。忘れはせぬ」

「では。私が忘れさせてやる」

清明はそれしか言わない。言えはしなかった。

「ここだな」

「では。倒してみせよ」

入鹿はそう告げて口を開いた。そこから黒い光を放って清明を貫こうとする。

清明に当たる瞬間だった。彼は姿を消した。

「むっ!？」

「その黒い光」

清明の声だけがする。

「そなたの怨みか。それだけの怨みを長きに渡って抱いてきたのだな」

「何処だ、何処にいるのだ」

「だがそれも終わりだ。これで」

答えはしない。清明は己の言葉を告げるだけであった。

「何もかもな」

「何処にいと聞いておるのだ」

「ここだ」

ようやく入鹿の言葉に応えた。そうして姿を現わしたのは。

入鹿の目の前であった。そこに剣を構えて宙に浮かんでいるのであった。

「そこであつたか」

「消えるがいい」

清明はそう入鹿に告げると剣を横に払った。入鹿が何かをする時

間もなかった。

入鹿の首と胸が裂かれたように見えた。それを最後として彼も黒い霧として姿を消してしまった。彼を最後に怨霊達は姿を消してしまったのであった。

「お師匠様」

「ご無事ですか？」

清明がふわりと地に降り立つとそこに弟子達がやって来た。見れば彼等は無事であった。

「私は何ともない。しかし」

「しかし？」

「この件はかなり深刻な話だ」

彼は暗く思う顔でそう述べた。

「今日はこのまま帰るが明日すぐに関白様のところへ参るぞ」

「道長様のところにですな」

「そうだ。そしてありのままお伝える」

そう弟子達に告げた。

「それでよいな」

「はい、それでは」

「明日また」

「そうだ。それでは一旦屋敷に戻るぞ」

こうしてこの日は一旦屋敷に戻って休んだ。次の日彼は朝早くに道長の屋敷に入った。そうして昨夜のことをありのまま道長に述べたのである。

「怨霊達がか」

「はい」

清明は道長に対して全て話したうえで応えてきた。

「その通りです」

「正直その者達のことは聞きたくはなかった」

道長は頂垂れた顔で言うのだった。傲岸不遜とさえ言われこの世でできぬことはないと言った彼にしては珍しい顔であった。

「全て我が家に怨みを持つ者ばかりじゃ」

「御存知でしたか」

「知らぬわけがない」

道長は言った。藤原氏は権力の座につく為に多くの政敵を排除してきた。とりわけ弥生時代や奈良時代前期にはそれにより命を落としたりした者も多い。そして藤原氏が縁組によりこの当時完全に取り込んでいた皇室もまた。皇室同士争いにより多くの血が流れているのである。道長はこれも知っているのである。

「そして帝にもか」

「左様です」

「怨霊達は一応は消えたのだな」

「とりあえずは消えました」

清明は道長の問いにこう答えた。

「ですがこのままでは。怨霊というものは」

「怨みを完全に消さぬ限りまた蘇ってくるものだな」

「その通りです、彼等の魂は不滅です」

肉体はそうではないが魂というものはそうなのである。だから一度消されても時が経てばまた蘇る。とりわけ怨霊という存在はそうであるのだ。

「では。鎮めるしかあるまい」

それを聞いた道長の決断はこれであった。

「寺に社を建ててな。それで彼等を鎮めるのがよからう」

「是非共そうされるべきです」

清明もそれに賛成するのであった。

「悪しき霊は怨みを容易には消しはしません。しかし」

「その心を鎮めていけば少しずつだな」

「はい。それしかありません」

「わかった。しかし」

道長は言うのだった。あらためて何かを思ったかのように。

「人の怨み程厄介なものはないな。わしはそれを買う立場であるし

そういうことをしてきただけにそれがわかるわ」

「ですか」

「うむ。わしとて神経がないわけではない」

彼も人である。それならば感じるどころがある。この度の怨霊についてはとりわけそうであった。そうして彼が至った結論とは。

「わしも。いずれは彼等の菩提を弔おうぞ」

そのせいかわからないが道長は後年出家する。平安時代においては老年に達すると出家するのが普通であった。だがそこにこの辻の話があったかどうかは彼以外は知ることがない。清明もまたそれについて何も話すことがなかったからである。今は昔の話である。

あわわの辻 完

2007・12・9

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6011d/>

あわわの辻

2010年10月8日15時04分発行